

## 『俘虜記』、『野火』から

### 『レイテ戦記』へ

From "Record of TOW", "Fires on the Plain"  
to "The Record of Leyte Battle"

齋 崎

一 はじめに

「戦争抜きで大岡昇平の本質は語れない」<sup>(1)</sup>と、埴谷雄高氏が言ったように、戦争体験が大岡昇平氏の人生の重要な一部であり、その体験をもとにして書いた小説は氏の文学の中で重要な位置を占めている。フィリピン戦場での氏自らの体験を記録した『俘虜記』（『文学界』「一九四八年二月」に発表されたのが短編『俘虜記』である。後一連の俘虜記物語をまとめて合本『俘虜記』（創元社、一九五二年）とした）をはじめ、中編小説『野火』（『展望』、一九五一年一月～六月）と原稿用紙二千枚にもなる大作『レ

イテ戦記』（『中央公論』、一九六七年一月～六九年七月）が、大岡氏の文学の最も代表的な作品である。

厳密に言えば、『俘虜記』は大岡氏の戦争体験及び俘虜体験を忠実に記したものであるが、『野火』は「体験の意味を追求する思想的な要素」<sup>(2)</sup>を持った、フィクション小説で、『レイテ戦記』も、「一人の敗兵の体験は、ついにレイテで戦った八万人の将兵の体験へと拡張されていった」<sup>(3)</sup>といわれたように、氏の実体験を少しずつ超えているものである。加賀乙彦氏は、大岡氏の戦争体験と小説創作の問題について、「作者は、『俘虜記』では体験と密着しており、『野火』では体験と距離をおいており、『レイテ戦記』ではさらに遠方から俯瞰している。」と指摘し、さらに作者のこのような「体験へ向かう姿勢」の違いと作品の内容、様式の違いを比較して、「一方の極において体験は仮構へ向い、他方の極において事実に向かう」という「大岡昇平の文学の構図」を描き出した<sup>(4)</sup>。

従来、大岡昇平の文学の研究の中でその戦争体験と創作との関わりに触れるものが多いが、しかし今まで指摘された通り、体験を単に作品の素材と見るのは不十分であると

思われる。なぜなら、自分の人生において希有で異常な体験そのものの存在は、氏の作品の執筆において常に何かを意味するものであることも考えなければならないのである。一兵士の物語である『俘虜記』からスケールの大きい戦争を描いた『レイテ戦記』に至るまで、戦後の社会の推移の中で大岡氏の戦争体験がその文学の創作にどういう影響を与え、どういう変化をもたらしたのか、本稿ではこの問題を中心に検討し、大岡昇平の戦争体験と文学との関わりを別の角度から探ってみたいと思う。

## 二 「人間の真実」の探求

### ——『俘虜記』と『野火』

『野火』の末尾に「戦争を知らない人間は、半分は子供である。」という一文がある。短いが、戦争体験者の言葉は意味が深い。この言葉の根拠について、大岡氏は後の発言で、「戦争を知らない人は戦争という異常体験をすると、人間の真実を知る」と説明した。換言すれば、戦場という極限的な状況にほうりだされた人間の一人として、その

特殊な環境に生きる人の姿から、人間存在の原像を見、そこで「人間の真実を知る」ということである。こうした、戦争という無秩序社会においてこそ「人間の真実を知る」という主張には、大岡氏の戦争体験の重み、そしてそこから来る戦争に対する氏の根本的な認識が凝縮されていると思う。結論から先にいえば、「私自身の体験の確認と、太平洋戦争の俘虜の墮落の報告」<sup>(6)</sup>である『俘虜記』と人肉喰いという「敗兵のエゴイズム」のような主題を扱った『野火』には、戦争という「異常体験」を通して「人間の真実」を見つめようとする、作者の意図が貫かれているのである。大岡氏は、短編「俘虜記」(合本収録の際「捉まるまで」と改題。以下「捉まるまで」とする。筆者註)の執筆の動機について、自分の「捕虜体験、ことに捉まる前の二十四時間の気持ち、自分でたしかめたくて、一気に書いた」<sup>(7)</sup>と語った。このような、自分の体験を検討し確認しようとする姿勢が『野火』、『俘虜記』にも共通するものである。たとえば、「捉まるまで」には、大岡氏がマリアリアにかかって熱帯林中で倒れてアメリカ兵に收容されるまでの経過が描かれており、その中心となったのは、

アメリカ兵と遭遇した「私」が、なぜアメリカ兵を射殺しなかったという心理に関する綿密な考察だった。その考察の延長線上に『野火』があり、つまり、「捉まるまで」の、なぜ射殺しなかったかという問題は、『野火』では、なぜ人肉を食べなかったかというフィクションのテーマにおいて改めて深い意味を込めて追究されている<sup>(8)</sup>。一方、俘虜収容所にいた経験が記録された『俘虜記』において、大岡氏は俘虜という特殊な形の人間社会の実像を描くことによつて、その「集団の一員」だった自分の過去を確認しようとしていた。

しかし、自分の体験を文学の場で対象化し、自分自身の内部へ深く掘り下げるのは、その「異常な体験」を自分という人間の中で明確に論理化する必要を認めたからであろうが、ここで、問われたのは、戦争におかれた自分の意味だけでなく、広くいえば、敗走兵と俘虜という戦争の特殊の産物である者の心理と行動に現れた、極限状況下の人間の「生」と「死」の問題であった。換言すれば、『野火』のような虚構の世界であろうと、『俘虜記』のような記録小説であろうと、大岡氏にとって、それはいずれも「人間

の真実」を見つけ出すための一つの思考の場にほかならない。たとえば、「捉まるまで」の「殺すか殺されるか」という緊迫した状態下の心理の微細な動きの考察や、『野火』の人肉喰いをめぐる生の本能と倫理との葛藤の描写から、われわれは、追いつめられた孤独と絶望のうちに敗走する兵士の心理と行動を通して、戦争という異常な場における人間のあらゆる可能性を探り出そうという作者の意図が窺える。さらに、人間観察の目の鋭さを見せているのは、『太平洋戦争の俘虜の墮落の報告』だった『俘虜記』である。俘虜の集団の中における〈私〉の「変質」と「墮落」を、大岡氏は次のように描いている。

終戦後所内に春画が現れ出した時、私は多くの俘虜から春本を書くことを頼まれた。文士は何でも引き受けた。学生の頃仏語訳で読んだ『チャタレー夫人の恋人』の樹下の媾合の比喩的描写を思い出し、「田園交響曲」なる一本を書いた。(中略) いかにも墮落した俘虜の間に交わっていたとはいえ、春本を書いた私を汚らしい奴というかも知れない。しかし私は何も春本を書かなくても汚らし

い人間かも知れないのである。そういうことをいう人は、一度米軍の俘虜になって、一年コーンビーフばかり喰わされてみるといい。(『俘虜記』、「演芸大会」)

春本を必要とする俘虜たち、タバコを稼ぐために春本を書く〈私〉、みんな吾(我)カローリーの食事は保障されているが、目的のない退屈した俘虜生活のなかで、各自にふさわしい生き方で生きている。これは大岡氏が描いた「人間が何処まで墮落出来るか」という俘虜收容所の実像である。そういう特殊な環境において、「なにも考えない」俘虜の仲間たちはもとより、それに交わりながら常に理性の目を持った「文士」たる〈私〉でさえ、一人の「汚らしい」人間に過ぎない、と大岡氏は見ている。その「汚らしい」と自覚するところに、俘虜收容所で希望のない生活を送る人間の屈折した心理と、一種の悲哀が深く投影されているのではないか。

復員して「従軍記」の執筆を勧められた時、大岡氏は「ただ俘虜の生活なら書ける。人間が何処まで墮落できる

かってことが、そうだな、三百枚は書けそうだ。」<sup>(10)</sup>と語ったことがある。『俘虜記』と『野火』は、まさにこのような非日常的社会に生きる人間の姿から、「人間の真実」を探ろうとする氏の精神の産物にほかならない。

### 三 「告白」の文学

小林秀雄氏が大岡氏の初期の作品について次のように述べている。

大岡君の作品には、「俘虜記」以来、戦争を経験し、戦争を題材とした多くの作品に見られないひとつの特色がある様に思はれる。それは、戦争が純然たる個人的事件として執拗に回想されてゐて、政治的観点は勿論、他のどんな観念からも解釈されてゐない処にある。戦争といふ、少なくとも自分にとってはまったく無意味な、偶然な、強制された経験が、自分の心をどういふ風に傷つけ、どういふ具合に目覚めますか、その出来得る限り直接な意識、恐らくこれが出征以来、過去は死に、未来は信

じられぬ彼の精神の集中されたものである。(『武蔵野夫人』、  
『新潮・財政』一九五二年一月)

確かに、『俘虜記』『野火』において、戦場での出来事が描かれたにもかかわらず、大岡氏の考察の焦点が戦争の下に置かれた人間の存在にのみ当てられ、戦争そのものの解明には至らなかった。つまり、戦争を小説に書き続けた氏の創作の意図は、戦場に生きた兵士の生と死の意味の追求によって、戦争が一人の兵士にどのような作用をし、一人の人間にどのような結果をもたらしたのかを究明しようとするところにあるのである。視角を変えてみれば、戦争は実際、大岡氏にとって、「人間の真実」を観察する一つの実験室であり、「日常に座する大岡が、異常の場に於いて自己の日常的な思想の行為が完遂するかどうかを問う」<sup>(11)</sup>場所<sup>(11)</sup>に過ぎないといえよう。

『俘虜記』『野火』の執筆、発表と同じ頃に刊行された野間宏の『真空地帯』(河出書房、一九五二年二月)も戦後文学の中では大きな意味のある作品である。これは野間氏の陸軍内務班時代の経験をもとに書いたものであり、氏

はここで兵営にいるさまざまな人間像を描くことによって、軍隊生活の暗黒の実態を完膚なきまでに暴き出し、さらにそういう人間の持った歪んだ心理と行動を生み出した、軍隊という組織の非人間的性質の解明に全力をあげた。「兵営ハ条文ト柵ニトリカコマレ一丁四方ノ空間ニシテ、強力ナ圧力ニヨリツクラレタ抽象的社會デアル。人間ハコノナカニアッテ人間ノ要素ヲ取り去ラレテ兵隊ニナル」(『真空地帯』)と、主人公の曾田が言う。こういう曾田の軍隊観の根底には、「あらゆる人間関係を奪い去る機関。そしてそれに対して一つの人工的な、もはや人間関係とはいえない人間関係をあたえる機関」<sup>(12)</sup>、いわば一つの「真空管」なのだ、という作者の軍隊に対する辛辣な批判があったのである。戦争を題材にした小説について野間氏はこう語った。「戦争をほんとうに戦争としてとらえるためには、戦争(これは帝国主義にとってはさけることのできないものである)をなくする立場、戦争批判をはっきりとなしうる立場にたたなければならない。そしてそれは戦争のために、親、子、夫を失い、家をやき、はっきりと戦争の正体をみぬき、そのような過去を自分の前に据えて、打ち破り、

新しい世界をつくり出そうとしている人民の立場である。この場所までこない限り、戦争は書けないのである。」<sup>(13)</sup>と。『真空地帯』はもちろん、野間氏の別の作品にもしばしば見られるように、作者はまさに「戦争をなくする立場、戦争批判をはっきりとなしうる立場」に立って、軍隊及び戦争の「正体」をあばき、その暗い過去に置かれた人間の生をとらえようとしている。そしてこういう作品には常に苛酷な戦争体験を持つ作者の強い怒りと告発の姿勢が貫かれているのである。

戦記研究家高橋三郎氏によれば、戦争直後の日本社会では「旧体制の暴露と告発が歓迎され」たという。さらに氏は「それは占領軍の政策でもありませんが、一般国民の側もいわゆる『真相』なるものを聞かされて納得するக்கும்に、悲惨な結果を迎えた責任を軍部のせいにすることに疑問を抱きませんでした。この時期の『戦記もの』には軍部批判の姿勢が見られるのが普通です。」<sup>(14)</sup>と説明した。『真空地帯』が刊行されたのは一九五二年十二月である。まだ戦時下の暗い記憶が生々しく残っていた時期であるし、戦争や軍隊組織に対する激しい憎悪感が一般の人々に皮膚感

覚のようにしみつき、軍部の一切を悪と断じることが常識になっていたのである。従軍して「私的な制裁を受ける度に烈しい怒りが僕のなかにもえていて、僕は軍隊の正体をあばかずしては、絶対に死ねないと自分に言いかけた。」<sup>(15)</sup>というのが『真空地帯』を生んだ大きな原動力となっている。戦争及び軍隊の「正体をあばくことによって、旧い世界を「打ち破り」、「新しい世界」を築こうとする立場は、反戦思想の高まった戦争直後の日本社会における野間氏の文学創作にとって重要な意味があるのだろう。

「人肉喰い」及び「俘虜の墮落」という極限状況下の人間の姿を描くことによって、戦争の非人間的な性質を暴き、その悪を指弾する意味において、『俘虜記』『野火』は『真空地帯』と共通している。ただし、『真空地帯』で、社会の中に個人を据え、人間を「生理的・心理的・社会的存在として」<sup>(16)</sup>とらえようとする、野間氏の姿勢と、「私はあの経験はどういうものであったか、その経験に自分がどういうふうに反応したかを文章にして確かめたかったのであった」<sup>(17)</sup>と言ったように、戦争におかれた自分自身について徹底的に検討し、認識していく、という大岡氏の姿勢とは根本的

な違いがある。換言すれば、左翼運動に接近した経験、軍隊での苛酷な戦争体験が、野間氏に反戦思想に目覚めさせ、『真実地帯』のような戦争及び軍隊という暴力組織の解剖をテーマにした作品の執筆に導いたとするならば、大岡氏はその文学の中で解剖しようとしたのは、戦場での地獄のような敗走体験と屈辱的な俘虜体験から見た、極限状況に生きた人間自身なのである。

「僕の今の状態は他人のことを書くに適していない。告白したい思いで一杯だ。」<sup>(18)</sup>と、戦後の日常社会に戻った大岡氏は言っている。むろん、この「告白」という強烈な願望に、自分の異常な体験から発見した「人間の真実」を伝えようとする、氏の切実な思いが込められているが、その後には戦争という「無意味な、偶然な、強制された経験」に深く「傷つけ」られた人間の悲しみも感じられないことはない。いってみれば、大岡氏が自分の戦争体験を書いて確かめることが、同時に〈被害者〉としての自分を見ようとするのである。国に強制されたこの体験について、氏は次のように回想している。

私は既に日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦争に引きずり込んだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も賭さなかった以上、今更彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤わないためにも、そう考える必要があったのである。(『俘虜記』、「捉まるまで」)

これは氏が輸送船でフィリピンに送られた時の感想だった。死地へ積み出されながら、国の強制力に抵抗する手段がまったくない、という個人の惨めさを自覚せざるを得ないという態度の根底には、「昭和初期の転向時代に大人となった私は、権力がいかに強いものであるか、どんなに強い思想家も動揺せずにはおかないものであるかを知っていた。そして、私は自分の中に少しも反抗の欲望を感じなかった。」<sup>(19)</sup>という苦渋の経験がある。「一介の無力な市民」か

ら「一國の暴力を行使する組織」への「無意味」な抵抗を「否定」したかわり、むしろ「彼等によって与えられた運命」に従うほかはない。こういう反省によって、大岡氏の内部では、ある種の「運命」観が確立された。つまり、この「出征以来、過去は死に、未来は信じられぬ」世界にあるのは、「運命」の偶然、あるいはそれがもたらす事実の結果しかないのである：「彼等は死に、私は生きた。この事実の受け取り方に二様あるわけではない。あらゆる生還者はその告別式風の物悲しい仮面のしたに、こういうエゴイズムを秘めている。心情の問題ではない。事実の結果である。」(『俘虜記』、「サンホセ野戦病院」)戦場での「事実」を「正確に」認識する氏の目は冷徹で理性的なものであるが、そこに「一介の無力な市民」の惨めな姿も映っているように思われる。

戦争という異常な体験を「告白」することが、作者にとつては「それまで抑圧された自己の恢復」<sup>(21)</sup>に向かう過程なのであるが、国家の強制の犠牲であった(被害者)の意識に覆われ、精神が悪夢のような戦争体験から完全に恢復さ

れていないかぎり、個人的体験の「告白」を越え、その苛酷な体験をもたらしたすべての要因を明らかにするのは不可能なのである。それが一つの原因となって、結局大岡氏は、戦争を題材にして『俘虜記』『野火』を書いたにもかかわらず、その筆は戦争の意味の解明より戦場での兵士の経験した一断面の描写、そしてそういう歴史の強力な動きの末端にほうり出された人間の運命の「告白」にとどまらなかつた。

#### 四 全体的視点の確立 『レイテ戦記』の執筆へ

帰還後、「従軍記」の執筆に取りかかろうとする大岡氏は次のようなことを語っていた。

あの過去を、現在の私の因数として数え尽くすためには、私はその過去を生んだ原因のすべてを、私の個人の責任の範囲外のもので、全部引っかぶらねばならぬ。私のような才能のない者が、どうしてそれをやらねばならぬのである。誰かほかにもやる人はないものか。(『再



会』、『新潮』、一九五一年十一月)

一兵士の体験という限られた範囲の中では戦争の本質、及び体験の意味を正しく認識することが不可能である。やがてこの個人的体験の限界を超え、戦争の全体的構造の解明が行われたのは、フィリピンのレイテ島で起きた日米両軍の決戦を対象として描いた『レイテ戦記』なのである。二年七月にわたる連載の中で、大岡氏は大量の資料を参考にし、日本人、アメリカ人、フィリピン人、そして、将軍から兵士に至るまで多様な視点を持って戦争を捉え、「レイテ島における決断、作戦、戦闘経過及び結果のすべて」<sup>(22)</sup>、即ちレイテ戦の全貌を紙面に再現しようとしていた。「人間が何処まで墮落出来るか」を訴えるという「告白」する行為から、戦争という歴史の「すべて」を巨視的な眼で捉えようとする、いわば「認識」する行為への移行の過程において、歴史書の不備や軍人の戦記の虚偽への憤慨など『レイテ戦記』の執筆に導いた原因はさまざまあるが、「事実と判断したものを、できるだけ詳しく書く」のが、「戦って死んだ者の霊を慰める唯一のもの」で、「私に出来る唯一のことだ」と大岡氏の述べた通り、氏の元兵

士としての体験が極めて大きいものだと思われる。それが集中的に現れたのは、「銀河丸」出航ニュースの衝撃と「レイテ同生会」での経験であろう。

一九五八年一月から七月まで、雑誌『新潮』に連載された「作家の日記」に、大岡氏の詩が掲載されている。

おーい、みんな、

伊藤、真藤、荒井、厨川、市木、平山、それからもう一人の伊藤、

そのほか名前を忘れてしまったが、サンホセで死んだ仲間達、

西矢中隊長殿、井上小隊長殿、小笠原軍曹殿、野辺軍曹殿、

練習船「銀河丸」が、みんなの骨を集めに今日東京を出たこと報告します。

(中略)

僕も自分で行きたかったんだが、

誰も誘ってくれる人はなく、

なまじ生きて帰ったばかりに仕事があり、

仕事のせいで行けないんだ。

ここでこうやって言葉を綴り、うさ晴らしするだけとは  
なさないが、

なさないことは、ほかにもたくさんあるんです。

誰も僕の気持ちを察してくれない。

なさない気持ちで、僕はやっぱりいきている。

わかって貰えるのは、みんなだけなんだと、こん日この  
時わかったんだ。

.....

詩は全部で一六一行もある。一九五八年一月十三日、フィ  
リピン派遣遺骨収集船「銀河丸」出航のニュースに「痙攣  
的な反応<sup>(23)</sup>」を起こし、「涙を流しながら」その日の日記に  
書いたものである。個人の「戦争体験を書き終わり」、「結  
構呑気な生活を送っていた」<sup>(24)</sup>大岡氏に戦場の日々を頭に  
呼び戻させたのが、このニュースだった。「別に深い交際  
でもないのに、あの故郷を何千里も離れた異郷の町で、野  
で、林の中で、同僚がある瞬間とった姿勢とか表情とかが、  
まるで私の一部となってしまうたかのように、思い出され

て来る。」と、氏は言う。いままで「敗兵のエゴイズム」  
<sup>(25)</sup>  
とか「俘虜の墮落」とかいう人間性の暗部を暴き出し、同  
僚即ち自分と同じ運命である兵士の死に対する同情、憐憫

などの感情の露出を排し続けてきたが、テレビのニュース  
によって、大岡氏は自分と死者の間に強い連帯が存在して  
いることを知らされた。「おーい、みんな」と感情を込め  
た呼び声の中で、氏の内部では「俘虜体験が死んで、戦争  
体験がよみがえってきた」<sup>(26)</sup>のである。この戦争体験に映っ  
てくるのは、無論氏自身だけでなく、かつて戦場で日々運  
命をともした「同僚」の兵士たちの姿に違いない。そう  
いう死者たちとの絆の存在を強く意識し、連帯を求める大  
岡氏の心情の流露が、「わかって貰えるのは、みんなだけ  
なんだと、こん日この時わかったんだ」という死者との対  
話から察せられる。いってみれば、「銀河丸」の放送を見  
たときの「痙攣的な反応」という無意識的な行動が、大岡  
氏を意識的に戦争を見ようとする世界に導いたのではない  
かと思われる。

氏のこのような意識の転換は「レイテ同生会」でも確認  
できる。

で、みんな昔のことを偲ぼう、山の中の生活を忘れないようにしよう、といって世話人が塩を出したわけですよ。するとなんか胸がいっぱいになっちゃって、涙がこみ上げてきて、その塩がなめられないんだな。（『戦争』、大光社、一九七八年十月）

一九六六年五月、愛知県蒲郡で開かれた「レイテ同生会」が『レイテ戦記』執筆の直接的なきっかけとなったことは周知の通りである。塩は敗戦の戦場では命を支えた貴重品であった。席上で世話人が出した塩は、みんなの思いをフィリピンの山中に連れ戻し、そこでの非人間的な生活をもう一度味わせた。そればかりか、胸にこみ上げてきたいっばいなものに無残な戦争で命を奪われた仲間への思いが満ちていることはいまでもない。いいかえれば、一粒の塩の衝撃で、生者と死者との感情の交流が成立したばかりでなく、生者の内部では、その戦争体験の深層にある死者たちとの連帯感がはつきりと意識の表面に浮かび上がってきた。そして、死者たち、さらにすべての生存者に深く関わりあっ

た戦争を全面的に認識しようとする意志が、やがてこのような戦場での共同体験による連帯の意識から生まれたのである。

大岡氏は書き下ろしの長編『戦争』（前掲）の中で、「われわれ兵隊は戦争の大きな動きによって、木の葉の如くあちこち吹きまかれるんだけど、その吹きまかれる方にはそれぞれ原因があるんです」と語った。日米両軍の作戦の説明、戦局の分析から個々の戦闘の様子の詳細な記述にいたるまで、戦争を全体的に、構造的に捉えようとする『レイテ戦記』の執筆の意図は、まさに、このような兵士の一人一人の行動に作用する、戦争の大きな動きのすべての「原因」を明らかにするところにあるのである。無論、戦場の出来事を一つの偶然的な事件として捉えるのではなく、戦争全体を覆った歴史の必然的な作用を説明しようとする姿勢の確立は、いつてみれば、〈被害者〉たる個人的視点の束縛から解放され、一つの歴史的、全体的な視点を獲得することを意味するのであろう。少し付け加えれば、この、戦場という大きい空間を俯瞰する、全体的な視点の中には、兵士の立場に立った作者の、戦争と戦争を強行する

軍の上層部への痛烈な批判が含まれているのである。

日常生活では、このような極限状態（フィリピン戦場で起きた食人事件のこと、引用者註）が生じないように配慮するのが為政者の責任であるから、裁判はこれを緊急避難として許すのである。兵をして飢えしめないのは、無論軍の責任である。ところが大本営が太平洋戦線一帯で取った遷延作戦では、その責任を放棄していた。「永久抗戦し悠久の皇運を扶翼し奉り、従容として、皇国の人柱たれ」と山下大将は訓示した。これは大本営陸軍部の本土決戦のために時間を稼ぐ、作戦上の必要からである。硫黄島も沖繩もこの方針に従って、兵士に苦しい抵抗を課し、沖縄県民に集団自決を強いた。（『レイテ戦記』「三十、エピソード」）

一方、「想像を絶する精神的苦痛と動揺を乗り越えて目標に達した人間が、われわれの中にいたのである。これは当時の指導者の愚劣と腐敗とはなんの関係もないことである。今日ではまったく消滅してしまった強い意志があの荒

廃の中から生まれる余地があったことが、われわれの希望でなければならぬ。」（『レイテ戦記』「九、神風」という表現には、戦争体験、さらにその集団の共同体験に対する、大岡氏の新しい認識が表されている。逆にいえば、個人的体験でなく、集団の共同体験の意味づけ、そしてそこから民族精神の構造の究明の意志が『レイテ戦記』の執筆の原動力の一つではないか（小論「戦争体験と文学」『名古屋大学国語国文学』、一九九一年七月）では、慰霊のモチーフを中心に『レイテ戦記』における戦争体験と創作の問題を検討した。詳しくはそれを参照されたい）。もっとも、戦争に関する透徹した分析と辛辣な批判と、戦争体験に深く根ざした特攻精神への謳歌との間に見せた隔たりは、考えてみれば、元兵士だった作者の一種の心理の葛藤の現れなのであろう。つまり、戦争体験の意味を追い求め続けてきた大岡氏は、結局自分に永遠に解決できない問題を残していたのである。

『俘虜記』と『野火』において、大岡氏は戦争体験を極限状況におかれた自分を探る対象として扱っていた。が、

歲月の推移の中で、死者がよみがえり、死者たちとの連帯感が強まってくるにつれ、かつて死者たちと共有した戦争体験の存在が、大岡氏の内部ではきわめて大きい意味を持つものとなってくる。こういう体験に対する認識の変化は大岡氏に個人的体験の中で見た「人間の真実」を「告白」する姿勢から、戦争を全体的に捉え、その本質を明らかにしようとす姿勢への転換をもたらした。それはやがて「日本が持つことのできた最高の戦争文学である」（大江志乃夫）『レイテ戦記』の完成に結実するのである。

## 註

- (1) 埴谷雄高、野間宏、対談「大岡昇平の文学とその周辺」『海燕』、一九九・三
- (2) 本多秋五『物語戦後文学史』（新潮社、二六〇）
- (3) 加賀乙彦「大岡昇平における戦争体験と創作」『国文学』、一九七・三
- (4) (3) に同じ。
- (5) 大岡昇平、鮎川信夫、対談「時代と体験」『現代詩手帖』、一九七・二
- (6) 大岡昇平「私の戦後史」『文芸』、一九七・〇

- (7) 「大岡昇平」『現代の作家』、岩波新書、一九七・九
- (8) 大岡昇平は『野火』と「捉まるまで」とのモチーフの連結について、「この作品は『俘虜記』（「捉まるまで」）を指す。引用者註）の補遺として思いついたものです。例えば主人公の記憶喪失は、『俘虜記』の中で、米兵と向かい合った時の自分に見つけた記憶の穴を拡大したものですし、人肉喰いは敗兵のエゴイズムの極端な型として追っかけてみる気になったのです。」（創作の秘密『野火』の意図、『文学界』、一九七・二）と説明していた。
- (9) 大岡昇平「再会」『新潮』、一九七・二
- (10) (9) に同じ。
- (11) 増田和利「大岡昇平論―戦争の『怨念』と『方法』」『関西文学』、一九七・六
- (12) 野間宏「兵隊について」『野間宏全集4』「解説」〈兵藤正之助、筑摩書房、一九七・六〉に引用されたものをここで再度利用した。
- (13) 野間宏「戦争小説について」『新日本文学』、一九七・三
- (14) 高橋三郎『戦記もの』を読む―戦争体験と戦後日本社会（アカデミア出版会、一九七・二）
- (15) 野間宏「戦争文学について」(同) (12)
- (16) 野間宏「小説論Ⅲ」『鑑賞現代文学24 野間宏・開高健』「鑑賞」、角川書店、一九七・四）に引用されたものをここで再度利用した。

- (17) 大岡昇平「私の戦後文学」(『読売新聞』、一九四・八・七)  
 (18) 大岡昇平「疎開日記」(『群像』、一九五・九)  
 (19) 大岡昇平「出征」(『新潮』、一九五・二)  
 (20) (19) に同じ。  
 (21) 大岡昇平、古山高麗雄、対談「戦争体験と文学」(『季刊芸術』、一九七・四)  
 (22) 大岡昇平『レイテ戦記』「あとがき」(中央公論社、一九七・六)  
 (23) 大岡昇平「ミンドロ島再び」(『海』、一九九・八)  
 (24) (23) に同じ。  
 (25) (23) に同じ。  
 (26) 大岡昇平、開高健、対談「戦争、文学、人間」(『中央公論』、一九七・二)

(ユーチー 国文)